

平成三十年度

# 日本近世文学会春季大会

## ・大会プログラム ・研究発表要旨

期日 六月二日(土)・三日(日)・四日(月)

会場 白百合女子大学 講堂

〒182-0001 東京都調布市緑ヶ丘一丁目二五

一、出欠の葉書を五月十一日(金)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。

一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(学習院大学文学部)へお申し出ください。

一、大会経費は、参加費千円、懇親会費六千円です。

一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇一八〇一三三六三三三四、口座名「日本近世文学会春季白百合女子大学大会」)で、五月十一日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。

一、三日目(六月四日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。各自・各グループでお回りください。

一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。

一、宿泊等については、各自、早めに手配ください。

一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。

一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会春季白百合女子大学大会事務局

白百合女子大学文学部国語国文学科 日置貴之研究室

〒182-0001 東京都調布市緑ヶ丘一丁目二五

電話 〇三三三三二六―五一四四(内線六六八)

メールアドレス hoki@shirayuri.ac.jp

※会場校の負担軽減のため、大会二日目の会場校による昼食(弁当)の提供はございません。各自ご用意ください。また同様の理由から、参加者用の発表資料送付もおこないません。会員各位のご理解ご諒解をお願いいたします。(事務局)

# 日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、平成三十年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成三十年四月二十日

日本近世文学会春季大会会場校代表 日置貴之  
日本近世文学会事務局代表 鈴木健一

## 【会場】白百合女子大学 【行事】

第一日 六月二日(土)

委員会(一・二・二〇〇～一三・四〇)

委員会会場 二号館二階大会議室

大会受付(一三・〇〇)

開会時間(一四・〇〇)

研究発表会(一四・一〇～一五・五〇)

研究発表会場 講堂

1 江湖詩社による宋詩選集刊行について―南宋三大家を中心に―

2 国分青庄評林詩と幕末漢詩―大沼枕山・成島柳北「地震行」との関係―

3 石川雅望・曲亭馬琴の『三国演義』「空城計」本事と『天禄閣外史』

早稲田大学(院) 藤富史花  
早稲田大学(院) 松葉友惟  
明治大学名誉教授 徳田武

日本近世文学会賞授賞式・総会(一六・〇〇～一七・三〇)

懇親会(一八・〇〇～二〇・〇〇)

懇親会会場 十一号館カフェテリア

第二日 六月三日(日)

大会受付(一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部(一〇・三〇～一二・一〇)

研究発表会会場 講堂

4 浅井了意の仏書について―「浄土三部経鼓吹」の典拠を中心に―

お茶の水女子大学研究員 木村 迪子

5 小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』著者書人本から見えるもの―成立時期と編纂意図を中心として―

佐賀大学 中尾 友香梨

6 多田南嶺と伊藤東涯・梅宇兄弟

同志社大学 神谷 勝広

昼 休 み (二二・一〇〇～二三・三〇)

編集委員会会場 一号館二階二〇三教室

研究発表会 午後の部 (二三・三〇〇～二五・四〇)

研究発表会会場 講堂

7 秋里籬島による「凶会もの」読本の形成とその周辺

お茶の水女子大学 藤川 玲満

8 木村黙老の蔵書目録致―多和文庫蔵『高松家老臣木村巨所蔵書籍目録残欠』―

愛知県立大学 三宅 宏幸

9 光格上皇の文化的行事およびその再興

大手前大学 盛田 帝子

10 『四季交加』と『四季物語』

国文学研究資料館名誉教授 大高 洋司

閉 会 (二五・四〇)

第三日 六月四日(月)

文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

図書展示 白百合女子大学図書館所蔵近世文学資料展

日時 六月一日(金)～二十三日(土)

学会開催期間中、六月二日(土)は一〇・二〇〇～一七・五〇開館、三日(日)は図書館休館のため閲覧不可、四日(月)は八・四〇～二〇・〇〇開館となっています。

場所 白百合女子大学図書館

また、大会一日目・二日目に、学内に移築されている歌人菊池袖子の生家「めぐみ荘(旧菊池家住宅、国登録有形文化財)」を開放いたします。公開時間は、六月二日(土)は一〇・〇〇～一七・〇〇、三日(日)は一〇・〇〇～一五・三〇となります。こちらもお立ち寄りください。なお、四日(月)は開放しておりませんので、ご注意ください。

※会場にて『近世文藝』九五号・九六号を無料配布いたします。

## 江湖詩社による宋詩選集刊行について

—南宋三大家を中心に—

早稲田大学(院) 藤 富 史 花

享和から文化年間にかけて、江湖詩社の詩人たちは南宋三大家(范成大・楊万里・陸游)を中心に、和刻本の宋詩の選集を陸續と刊行した。『宋三大家絶句』(享和三年刊)、『三家妙絶』(文化四年刊)、『広三大家絶句』(文化九年刊)などがあるが、これらは清人の選んだ大部な総集から三大家の七言絶句のみを採ったもので、清版の総集をそのまま覆刻したものでなく、独自の編纂意図に基づくものであった。

江湖詩社が七絶を偏重した背景には、当時の士農工商各層へ漢詩を普及させようとの意図があった。各層の初心者が漢詩を作る際は、詩体の中で最も作りやすいとされる七絶が中心となるからである。広瀬淡窓はその背後にある商業的意図を看取して「識趣鄙陋ナリ」(『淡窓詩話』明治十五年刊)と批判した。

しかし、江湖詩社の詩人たちの企図したところは商業的成功だけではなかった。彼らは、宋詩選集と並行して南宋三大家の別集も刊行した。そこに載る詩と、『宋三大家絶句』といった宋詩選集に載る詩とを、これらと和刻本が依拠した清版と対比しつつ検討すると、基本的に重複がなく、併読を前提に編集されたと分る。南宋三大家の選集と別集とを併読することで、七絶以外の詩体も和刻本を通して学べるように企図されていた。

江湖詩社の詩人たちは自身の作詩でも、これらの宋詩選集編集過程で撰取すること多く、後進に範を示す意図があったと考えられる。

## 国分青厓評林詩と幕末漢詩

—大沼枕山・成島柳北「地震行」との関係—

早稲田大学(院) 松 葉 友 惟

明治から昭和にかけての漢詩人である国分青厓の詩業の一つに、新聞『東京電報』や『日本』の「評林」欄上で、新聞の記事に典拠を取りながら時事を批評する漢詩(以後「評林詩」と称する)が存在する。

その中でも明治二十一年の磐梯山噴火を詠んだ「磐梯山噴火(罌羣鬼)」は青厓の評林詩集「詩董狐」の第一首に録される代表的な作品である。本発表では明治三十九年三月三十一日付の『台湾日日新聞』に、明らかに本作を換骨奪胎したものである漢詩「地震行」(三屋大五郎の作である同年に起こった台湾の嘉義大地震を詠んだもの)が存在することをまず指摘する。

その「地震行」という題は、大沼枕山や成島柳北が安政の大地震を受けて作った漢詩の題でもある。当時の評林詩の読者が、青厓の「磐梯山噴火」を、枕山や柳北の「地震行」の流れに位置するものとして受容していたことがこのことよりわかるのである。そして、枕山らの「地震行」が、災害被害の詳細を伝えつつ為政者批判をするという、青厓の「磐梯山噴火」に代表される評林詩と共通する性質を持つものであることを指摘する。

最後に、青厓の評林詩は枕山や柳北の「地震行」のような幕末の漢詩の流れを汲むものでありながらも、新聞という明治の新たなメディアと結びついたことでさらなる発展を遂げ、人氣を博したものであるということを示したい。

# 石川雅望・曲亭馬琴の『三国演義』『空城計』 本事と『天禄閣外史』

明治大学名誉教授 徳 田 武

『南総里見八犬伝』第十九回に、「便是黄叔度が、琴を鼓して群賊を、退けしという謀におなじ」とある。

普通、右の文章から連想するものは、『三国演義』第九十五回「武侯弹琴退仲達」（通俗三国志）四十「孔明智退仲達」に描かれた、諸葛亮の空城計であろう。ところが馬琴は、これを黄叔度の話とする。この黄叔度の空城計は、明の王逢年の偽書『天禄閣外史』巻二「兵法」に見える。すなわち馬琴は、『演義』の空城計は、『外史』の黄叔度の話に基づく認識しているのだ。

この認識は、馬琴より早く石川雅望の『ねざめのすさび』巻一に記されており、馬琴は寛政九年（一七九七）に、この記事を『蛾斎斎慢（ママ）筆』初巻から筆写している（早大図書館曲亭叢書）から、この認識を雅望から得て、『八犬伝』に記したことになる。

『外史』の成立は嘉靖末年（一五六六）、『演義』の最初の版本である嘉靖本は、同元年（一五二二）の刊行である。よって、『外史』が『演義』から空城計を取ったと考えられ、現在の『演義』研究から見れば、雅望や馬琴の認識は誤っている。しかし両人の記述から、『外史』が『演義』の空城計を改作した事が判明し、これは当時の唐土にも見出されない発言のようであり、当時の日本で『演義』研究が進展していたことを確認できる。

## 浅井了意の仏書について

—「浄土三部経鼓吹」の典拠を中心に—

お茶の水女子大学研究員 木 村 迪 子

近世前期の仮名草子作家・浅井了意は真宗大谷派の僧侶でもあった。寛文七（一六六七）年に『善悪因果経直解』を上梓して以降は、仮名草子よりむしろ仏書の著述活動に励んだと言われている。

本発表では了意の仏書の内、特に「浄土三部経鼓吹」（寛文八・延宝二年）を取り上げて、その典拠精査の結果を述べる。

調査の結果、『阿弥陀経鼓吹』・『無量寿経鼓吹』には、『存覚法語』・『教行信証』などの真宗聖教利用が認められた。しかし、その利用は書名を隠し、文章を一部改変したもので、一見してそれとは分からないものであった。真宗聖教の不明瞭な利用の半面、『無量寿経鼓吹』・『観無量寿経鼓吹』においては、了意の『大経抄』、聖阿の『釈浄土二藏頌義』、聖総の『大経直談要註記』、良忠の『観経疏伝通記』といった浄土宗学僧著述の古註が積極的に用いられ、特に『頌義』・『大経抄』については書名が記載されていたことも判明した。更に、了意の生前に刊行された仏書の内、『大原談義聞書鈔句解』延宝六年）巻一・二三興御書異説』に『教行信証』を引く以外に、真宗聖教について書名を明示した引用記述が確認できなかったのである。

この調査結果を受けて発表者は、了意が自発的な真宗聖教利用の制限を行った理由が、東本願寺に所属する学僧ではなかったことや、彼の父が弟・西川宗治の東本願寺出奔に関わって破門になったことにある可能性を指摘する。

## 小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』著者書入本から見えるもの

— 成立時期と編纂意図を中心として —

佐賀大学 中 尾 友香梨

『十帖源氏』は貞門俳諧師・野々口立圃(一五九五—一六六九)の手になるものである。佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫本は、著者の自筆跋文を有するものとして早くから注目を浴びたが、それ以上の考察がなされることはなかった。実は該書には夥しい数の書入れがあり、墨の書入れは跋文と同様に著者の自筆であることが判明した。

『十帖源氏』の成立時期については、承応三年(一六五四)がほぼ定説となっているが、小城鍋島文庫本の著者書入れは、慶安年間になされたものであり、したがって『十帖源氏』の成立と刊行は慶安四年(一六五二)を下らない。

源氏物語の絵入版本は、立圃と同じく貞徳に学んだ山本春正の『絵入源氏物語』(慶安三年十一月跋)が最初のものとされ、立圃の『十帖源氏』はこれに対抗して作られたものと位置づけられているが、実態は逆であった可能性がある。

早稲田大学九曜文庫と国立国会図書館にも、小城鍋島文庫本と類似する書入れをもつ『十帖源氏』が蔵されており、立圃門の俳諧師が所有していたものと見られる。このようなことから推測されるのは、立圃が俳諧を教授する一環として『十帖源氏』の講義を行ったこと、『十帖源氏』の編纂意図もけっして従来いわれているように源氏物語を普及させるのが第一義ではなく、まずは俳諧師の教育にあったということである。

## 多田南嶺と伊藤東涯・梅宇兄弟

同志社大学 神谷 勝広

現在、多田南嶺(一六九四—一七五〇)は神道家・浮世草子作者として、伊藤東涯(一六七〇—一七三三)・梅宇(一六八三—一七四五)兄弟は儒学者として、主に認識されている。そのため、南嶺と伊藤兄弟の関連は等閑視されていないか。

しかし従来指摘を受けていないが、南嶺は享保十四年(一七三〇)に東涯に入門し、知人(伊勢の矢納勘介・伊丹の北河原助三郎など)の紹介もしている。また自作の浮世草子に東涯周辺の人物をモデルとする。これまでの指摘としては、神谷が香川修庵の事例に言及した以外なかったが、陶山南濤・堀南湖・沢田一斎などもモデルになっている。

さらに、南嶺と梅宇に直接交流があったかは未詳ながら、梅宇の随筆『見聞談叢』(元文三年(一七三八)自序)に見える痛烈な山崎闇齋への批判が、南嶺の随筆『ぬのはの草紙』(寛保三年(一七四三)自序)や氣質物浮世草子『鎌倉諸芸袖日記』(同年刊)・『世間母親容気』(宝暦元年(一七五二)刊)へも影響していることを、今回新たに指摘する。

南嶺浮世草子の場合、人脈の調査によって身近なモデルの存在が浮かびあがり、作中におけるモデルへの揶揄・批判などが見えてくる。そこから、その揶揄・批判などを楽しむ読者が読者層の一部にいたことも想定可能となる。つまり、伝記の解明・作品の読解・読者層の把握、これらが連動する。

## 秋里籬島による「図会もの」読本の形成とその周辺

お茶の水女子大学 藤川 玲 満

秋里籬島作『源平盛衰記図会』（寛政一二年刊）『保元平治闘図会』（享和元年刊）『前太平記図会』（享和三年自序）は、読本の「図会もの」に位置付けられるが、従来、創作された部分が少ない故に、文学性の評価は芳しくなかったと言える。本発表では、籬島の「図会もの」読本とその周辺作について、原拠との相違とその方法、他の著作との連関を中心に検証し、作者の著述態度にどのような特質が認められるのか明らかにする。

人物に関する叙述では、『源平盛衰記図会』における源頼政、『保元平治闘図会』における信西の描写の背景に『信長記拾遺』（安永五年刊）等に見える彼等の文事への評価があると考えられ、『絵本朝鮮軍記』（寛政一二年刊）に描かれる毛利氏の臣下には籬島の家系との繋がりが窺える。本文の編集では、中国の史伝を短く掲げて付加した手法について、『誹諧早作伝』（安永五年刊）への漢詩文の語句の採録や名所図会の解説記事における典拠の考証と通ずる着想と意味が認められる。また、作者が考証の姿勢を持つことが、筋立てに創作を加えることの慎重さに繋がったと考えられる。加えて、自作の利用と『神皇正統記』の撰取が特徴的な『絵本年代記』（享和二年刊）の成り立ち、籬島の歴史への関心と交友圏との関連の可能性に言及したい。

以上のように、文学活動・傾向との関係から作品形成の実態と表現手法の意味を探究することで捉えられる、籬島の読本への進出の在り方について報告する。

## 木村黙老の蔵書目録攷

―多和文庫蔵『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』―

愛知県立大学 三宅 宏 幸

曲亭馬琴の知友木村黙老（名は亘）は讃岐高松藩の家老をつとめた人物で、馬琴が「書籍ハことの外好ミ候人ニて、奇書多くとり入候。」（天保六年正月一日付殿村篠斎宛書翰）と書くように、蔵書家であり、馬琴と書籍の貸借を頻繁に行った。

黙老の蔵書目録については、木村三四吾氏や神田正行氏によつて、鍋田三善編『静幽堂叢書』（宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵）所収の「讃藩黙老木村氏蔵書目録」（天保二年成立）が紹介されている。ただし、その掲載書目数の少なさから、本目録については「出府以来江戸在番中に蒐めたものの略目録」（木村三四吾氏）と結論づけられている。

しかし、右の目録以外にも、黙老の蔵書目録と思しき『高松家老臣木村亘所蔵書籍目録残欠』が香川県の多和文庫に所蔵される。『香川県史』<sup>15</sup> 芸文（近石泰秋氏執筆）などがごく簡単に紹介されたものの、その存在はあまり知られていない。

そこで本発表では、まずこの目録が黙老の蔵書目録であることとを、資料の筆跡、本資料の紙背の記述、黙老からの馬琴や殿村篠斎、小津桂窓宛の書翰、馬琴の日記などから確定する。その上で、①黙老の知識源の参考資料となること、②黙老の旧蔵書探索の手がかりとなること、③彼の文化圏の一端が判明することなど、資料が有する意義について明らかにする。

本資料は、黙老一人に留まらず、彼を取り巻く様々な文化・文学研究の一助となると思われる。

## 光格上皇の文化的行事およびその再興

大手前大学 盛田 帝子

文化十四(一八一七)年三月二十二日、光格天皇は四十七歳で皇太子恵仁親王(仁孝天皇)に譲位する。譲位後も熱心に仁孝天皇の歌道教育を行うとともに、仙洞御所での和歌御会や管絃の遊びを精力的に行ったが、文政七(一八二四)年になると修学院離宮の御茶屋を造立し、九月二十一日に御幸。上の御茶屋の中島の頂に建つ窮邃軒において和歌御会、当座御会、管絃の遊びを催した。もともと明暦元(一六五五)年に修学院を訪れ離宮の造営を計画して御幸を行ったのは後水尾院であった。続いて霊元院も御幸したが、その後絶えていたものを光格上皇が再興した。

天保八(一八三七)年二月二十二日は、後鳥羽院没後六百年忌にあたる。光格上皇は自らの意思で御法楽百首和歌短冊を水無瀬宮に奉納。奉行の冷泉左衛門督を水無瀬宮に参向させ神前で和歌を読みあげさせている。既に鈴木健一「後鳥羽院と後水尾院」(『近世堂上歌壇史の研究 増補版』二〇〇九年)に述べられているごとく、後水尾院は、寛永十五(一六三八)年後鳥羽院四百年忌の際に水無瀬宮法楽御会等の行事を催している。

光格上皇は精力的に御会和歌を運営し、歌道教育に励み、文化的行事を再興したが、後水尾院や霊元院を先例として上皇としての理想を目指したのではないか。修学院離宮への御幸、後鳥羽院没後六百年忌、光格上皇の詠んだ和歌などから、そのことを実証したい。

## 『四季交加』と『四季物語』

国文学研究資料館名誉教授 大高 洋司

山東京伝の風俗絵本『四季交加(しきのゆきかい)』(寛政十年刊)は、作者にとつて後半生の文芸活動の出発点に位置する作であり、その内容は(江戸年中行事職人尺俳文絵本)とまとめられる旨の指摘がある(井上啓治『京伝考証学と読本の研究』第一章)。今回新たに注釈作業を試みた結果、これを補足し得る点があったので報告したい。

本作の絵に添えられた江戸の四季をめぐる文章中に、「……書かれしも」のように引用と判断できるところが三カ所あり、うち一カ所の出拠は風来山人『根無草後編』四之巻であるが(拙稿「山東京伝―江戸っ子気質」)、残る二カ所は鴨長明に仮託された宮中の年中行事書『四季物語』によることが判明した。同書には写本と、これとは内容を異にする版本『歌林四季物語』(貞享三年刊の京版、同年刊の江戸版あり。ただし両者は別版)とがあり、京伝は写・刊の両方を見ている。

『四季交加』に引用されたのは専ら風物の描写であるが、『四季物語』利用の背景には、「江戸年中行事」の根底に「宮廷行事」を据える意図と共に、「鴨長明」のイメージが「店は商人心は隠者」(寛政六年夏京伝店売出しの引札)という洒落本処罰後の京伝の心境に通ったこともあるであろう。このことは、『四季交加』本文への『方丈記』また『徒然草』からの少なからぬ裁ち入れとも呼応して、源内戯文と共に、本作の大きな栄養源となったのである。



# MEMO

---

# MEMO

---

# MEMO

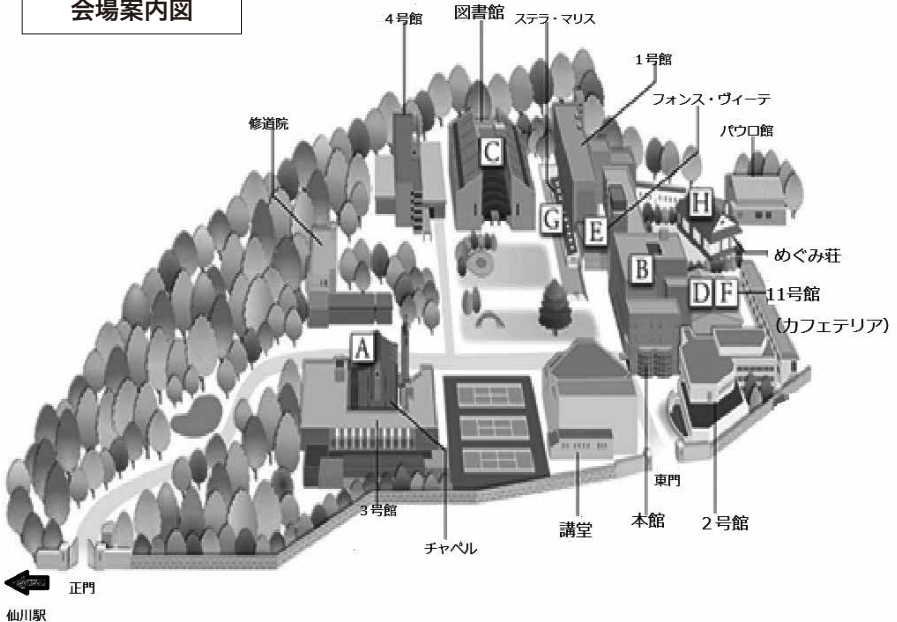
---

## 会場へのアクセス



- 京王線  
(区間急行・快速・各駅停車)  
・新宿駅・渋谷駅より約20分  
仙川駅下車、徒歩10分  
・地下鉄都営新宿線で笹塚駅乗換  
仙川駅下車、徒歩10分
- 小田急バス  
・JR吉祥寺駅(南口、バス停7番)より30分。白百合女子大学入口にて下車、徒歩5分。  
・JR三鷹駅(南口、バス停7番)より30分。白百合女子大学入口にて下車、徒歩5分。  
・小田急線成城学園前駅(西口、バス停1番)より15分。仙川駅入口にて下車、徒歩15分。
- タクシーをご利用の場合は、行先を白百合女子大学「東門」とご指定ください。

## 会場案内図



発表会場：講堂 委員会：2号館大会議室 懇親会：11号館カフェテリア  
 図書展示：図書館 編集委員会：1号館2階1203教室